



# 瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

受難の主日 A 年 (2026 年 3 月 29 日)

洗礼志願者といっしょに四旬節を過ごしましょう

主任司祭 小西広志神父

四旬節第六主日は、「受難の主日」と呼ばれます。イエスさまのエルサレム入城と受難の場面が典礼の中で読まれるからです。この日から、いよいよ聖週間が始まります。

さて、洗礼式の準備としての四旬節の最後に、洗礼式で行われる祭儀についてお話ししましょう。

まず、知らなければならないのは洗礼式は「秘跡」だということです。そして、「秘跡」は、「儀式」ではない、「祭儀」であるという点です。カトリック教会の「祭儀」は、イエスさまの死と復活に結ばれる、組み入れられるためになされます。これはとても大切なことです。

イエスさまは十字架で死んで、三日後に天の御父によって「死者の中から起き上」がらせていただきました。これを難しい言葉で「過越の神秘」と呼びます。死からいのちへ、暗闇から光へ、哀しみから喜びへと移行していく。それが過越です。過越は人間の力ではできません。父なる神さまの愛の想いがなければ無理なのです。

復活祭はこの「主の過越の神秘」を祝います。そして、わたしたち人間も、人間ばかりか、すべての被造物も、この神秘へと結ばれます。この神秘のなかへと組み入れられて行きます。この真実をカトリック教会では日本語で「あずかる」と呼びます。関係するという意味ですね。

つまり、「秘跡」とは「主の過越の神秘」へと「あずかる」ことなのです。もはや、わたしたちはイエスさまの十字架での死、そして三日後の復活と無関係ではないのです。そして、復活したイエスさまのお姿と、そのいのちにつながっているのです。

洗礼式、いえ、洗礼式に限らずすべての「秘跡」には儀式的な側面があります。司祭の洗礼の言葉、洗礼の水、聖なる香油、白い衣、洗礼式のロウソク、洗礼名、そしてご聖体を表

すホスチアなどなど。こういったものは「祭儀」を構成する「しるし」です。

「しるし」は、何かとても大切なものがあることを示してくれる「サイン」なのです。人間の五感に働きかける「アイコン」（記号）です。夜、救急車のサイレンの音を聞くと、どこかで誰かが病院に運ばれていることを知ります。踏切のカンカンという警報と赤いランプに気づくと、そこに線路があることが分かります。

同じように「秘跡」での「しるし」は、イエスさまの死と復活という「過越の秘義」に「あずかる」ことの「アイコン」となります。ですから、洗礼式では水の洗いを通して、主イエス・キリストに結ばれていきます。ミサではご聖体を拝領することで主イエス・キリストのように生きていくことが始まります。

洗礼式の「祭儀」は、特に主イエス・キリストの「過越の神秘」に目に見える形で「あずかる」こととなります。

受洗者は、小教区の皆さんの「諸聖人の連願」の祈りに支えられながら、こころと身体を神にゆだねます。続いて、洗礼のための「水の祝福」があります。天地が創造されたときから「水」は被造物の生活のそばにありました。

そして、「悪霊の拒否」のための問答が受洗者と司祭の間でなされます。今後、受洗者はこの世のむなしいものに惑わされず、神さまだけを見つめて生きることを決意します。そして、信仰宣言が問答形式でなされます。「信じます」はこれから始まる新しい生き方への決意でもあります。

いよいよ、「洗礼」となります。三度にわたって水を額にかけられます。これが儀式的に死を表す「アイコン」となるのです。

そして、洗礼を受けた人は新しいいのちをいきる者として、白い衣を受けます。復活のロウソクから「世の光」であるキリストを分けていただきます。さらに天国での親しい友人として「洗礼名」を授与されます。

成人の洗礼では、この後、堅信の秘跡が続きます。